

第23回日本エイズ学会学術集会・総会を開催して

名古屋市立大学看護学部

市川 誠 一（会長）

金子 典 代（学会事務局長）

2009年11月26日（木）から28日（土）までの3日間にわたって、名古屋国際会議場において、第23回日本エイズ学会学術集会・総会を開催しました。基礎研究、臨床研究、看護研究、社会医学研究の各領域の研究者、そして啓発活動を行っているNGO/NPO団体が一同に集まり、わが国のHIV感染症の対策について、「HIV/AIDS：その予防とケアへの協働—パートナーシップ、ネットワーク、コミュニティ」のテーマで、研究や活動の発表を行いました。

1. 本学会総会のねらい

わが国では、平成20（2008）年の未発症HIV感染者とエイズ患者の報告数が合わせて1557件と過去最高となり、HIV感染者、エイズ患者ともに増加が続いています。複数の抗HIV薬による治療「HAART」が導入されたことにより、エイズによる死亡者数は1997年以降激減しました。即ち、HIV感染症は、早期の検査で感染を知り、治療を受けることで、エイズ発症を防止できるようになりました。しかし、わが国ではエイズを発症してから報告される人の数は未だ増えています。本学会が開催された愛知県でも、名古屋市からの報告を中心に報告数の増加が続いています。

わが国においては、1980年代後半から国、自治体、地域ボランティア団体（NGOやNPO）によって、エイズについての啓発が積極的に進められてきました。しかし、HIVはそれらの啓発活動や検査・医療対策が届きにくい人々の間で広がってきました。そしてHIV陽性者への偏見や差別は今なお日本の社会にも存在し、こうした課題に取り組む必要性は今も続いています。社会のマイノリティである男性同性愛者、性産業従事者、滞日外国人の人々は、個人や集団へのアプローチが困難であることから、今なお脆弱なHIV感染対策の中にあり、そのためHIV感染のリスクが高い環境にあるといえます。HIV感染症に対して取り組むべきことは、早期検査・早期治療・治療継続の支援、そして相談や福祉面での支援であり、これらの体制をHIV感染対策が脆弱な人々に向けて行っていく社会的取り組みが、これらの人々やHIV陽性者への偏見・差別を低減し、またHIV感染の

予防にも貢献することになると考えます。このため、地域（コミュニティ）で、様々な関係機関がパートナーシップを連携（ネットワーク）し、その専門性を有効に発揮していくことは、HIVというウイルスとの長期にわたる戦略として重要と考えます。

このようなことから本学会総会では、“HIV/AIDS：その予防とケアへの協働—パートナーシップ、ネットワーク、コミュニティ”をテーマにしました。この学会で、基礎研究、臨床研究、社会医学の各領域の研究者のパートナーシップとネットワークを推進し、また地域社会における様々な関係機関のパートナーシップとネットワークを推進することで、HIV／エイズの研究を促進し、地域の人々へのHIV／エイズの啓発普及の機会にすることを「学会総会を開催するねらい」としました。（写真1）

2. 主なプログラム

学会員による一般口演（演題数359）を中心に、基調講演、特別講演、シンポジウムなどの発表が7つの会場で行われました。プログラム作成にあたっては、基礎領域、臨床領域、社会領域で偏りが生じないようにプログラム内容に留意した。この学会での新しい企画としては、会長が名古屋市立大学看護学部所属であることから新たに看護領域を設けたこと、薬剤師を中心とした一般演題



写真1 総会開会のあいさつ（市川誠一）

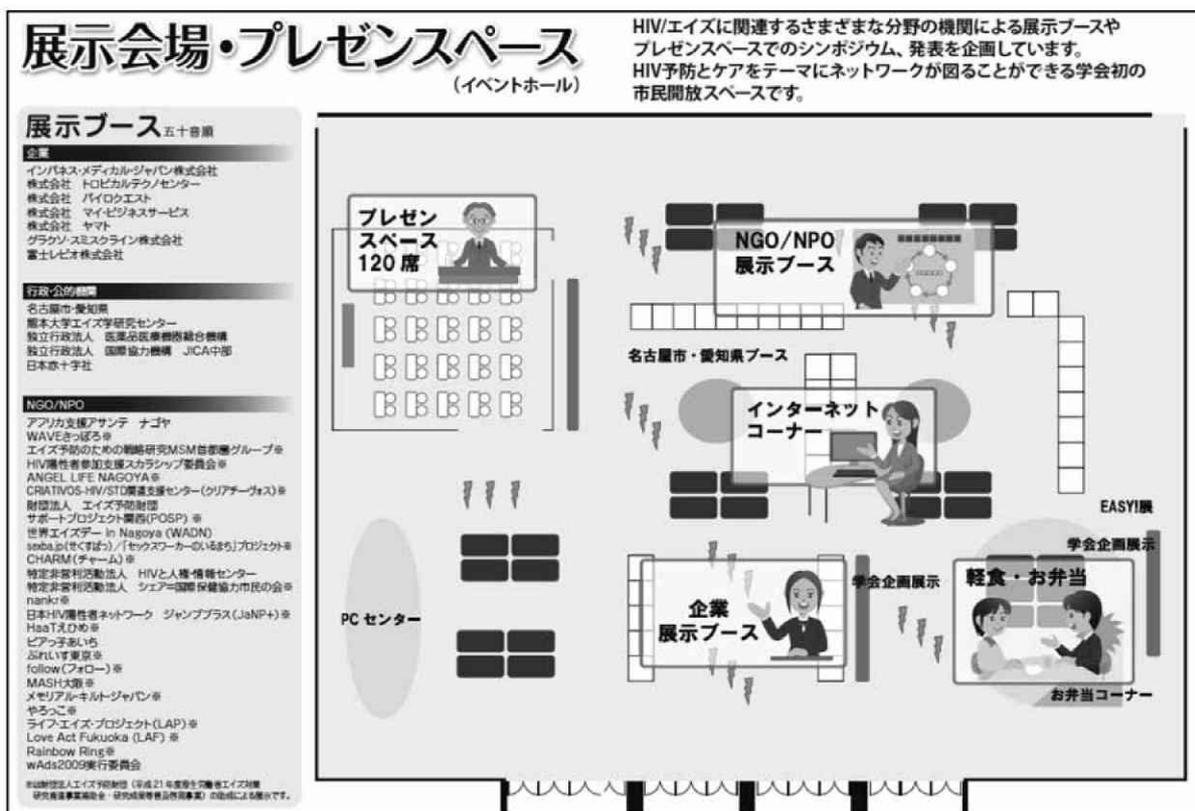


図1 学会の広報—展示会場の案内(公式ガイドから)

口頭発表のセッションを設けたこと、基礎・臨床・社会の若手研究者が領域を超えたシンポジウムを企画したこと、そして北海道から沖縄までのNGO/NPOの活動報告の展示、財・エイズ予防財団、JICA中部、日本赤十字、熊本大学などの展示、関連企業の展示と共に、シンポジウムやワークショップができるラウンジセッションコーナーを設けた展示会場を企画したことである(図1)。また学会の運営に関わる点ではあるが、受付、案内、会場照明などの係りは、NGO/NPOや大学生のボランティア参加を募集し、100人を超える応募者によって運営されたことも特記するところと考える。

学会主催プログラムの主なものを以下に紹介する。

1) 海外からの招聘講演

・基調講演:

- (1) Julio Montaner 博士 (President of International AIDS Society)
 “Seek and treat for optimal prevention of HIV/AIDS (STOP HIV/AIDS)”
- (2) Erik De Clercq博士(Rega Institute for Medical Research, K.U, Leuven)
 “State of the art on anti-HIV chemotherapy”

・特別シンポジウム:

“MSM (Men who have sex with men) Net-

works in Asia”

- (1) Jeffrey Grierson 博士 (La Trobe University, Melbourne, Australia)
 「ゲイ向け商業施設での性的社会的ネットワークと介入・支援」
- (2) Kyung-Hee Choi 博士 (CAPS, University of California, USA)
 「中国におけるMSMのネットワークを活用した予防介入」
- (3) Shui Shan Lee 博士 (The Chinese University of Hong Kong, Shatin, Hong Kong)
 「MSMの関係性: 香港におけるHIV陽性者のネットワーク調査」

・特別講演:

- (1) 加藤友朗博士(コロンビア大学, USA)
 「HIV陽性患者の肝移植—米国における現状と問題点」
- (2) Klaus Jansen 博士 (Ruhr-University Bochum, German)
 “Epidemiology, scientific networking and prevention tasks in the field of HIV/AIDS: The German experience and the Competence

Network for HIV/AIDS”

2) シンポジウム

- 基礎領域
 - (1) エイズ発症の危険因子としての微生物間相互作用 (4題)
 - (2) これからの抗HIV薬研究の進むべき方向 (4題)
 - (3) HIV細胞侵入とその防御機序 (4題)
- 臨床領域
 - (1) HIV-1感染と悪性腫瘍 (5題)
 - (2) HIV母子感染予防対策の成果・そして課題 (6題)
 - (3) HAARTにおける新たな展開—慢性疾患としてのHIV/AIDS (共催) (6題)
- 社会領域
 - (1) ニューグローバルウェーブと日本 (4題)
 - (2) HIVは本当に慢性疾患になったのか?~長期療養時代の陽性者支援の課題 (6題)
 - (3) わが国におけるHIV検査戦略 (4題)
 - (4) HIV感染対策におけるパートナーシップ—自治体とNGOの協働 (4題)
- 看護領域
 - (1) パートナーシップ構築のための面接スキル (2題)
 - (2) HIV看護の「専門性」について考える2—その一歩を踏み込むことと看護をめぐるネットワークの活用 (4題)
 - (3) 看護師のためのケースカンファレンス (2題)
- 若手研究者企画シンポジウム
 - (1) 基礎・臨床コラボ：基礎研究—臨床研究間の新たな接点を探る (6題)



写真2 臨床・社会コラボシンポ
(座長：金子典代、新ヶ江章友)

- (2) 臨床・社会コラボ：MSM 社会とのインターフェイサー—臨床・検査・社会の協働 (3題、写真2)

上記の企画のほか、厚生労働省エイズ対策研究事業研究班の研究成果発表会や関係企業によるサテライトシンポジウム (10テーマ)、共催シンポジウム (2テーマ)、ランチョンセミナー (8テーマ)、イブニングセミナー (2テーマ)、そして展示会場ラウンジセッション (7テーマ) が企画された。

3) 市民公開講演会：「若者の性の多様性-若年層のHIV感染の課題」(図2)

わが国のHIV/AIDSは、男性同性間の性的接触によるHIV感染者、AIDS患者が多く、15-24歳の若者ではHIV感染者の80%が男性同性間感染であり、増加が続いている。15-24歳の若年層のHIV感染対策としては、同性愛指向に対する社会の偏見等を考慮した取り組みが必要であることから、エイズ学会総会では「若年層の性の多様性」を市民公開講演会のテーマとし、参加者に性的指向に関する情報を提供すると共に、啓発の機会とすることにした。第一部では「なぜ同性愛と性同一性障害は混同されるのか」(風間孝講師、

図2 学会の広報—公開講演会の案内(公式ガイドから)

中京大学国際教養学部)、「ゲイ男性の生育歴とHIV感染リスク行動」(日高庸晴講師、関西看護医療大学看護学部)の講演、第二部では、「学校のなかのセクシュアル・マイノリティ」をテーマに、20歳代の同性愛者とパンセクシュアルのパネリスト4名によるトークセッション(ファシリテーター塩野徳史、財エイズ予防財団/名古屋市立大学大学院看護学研究科)を行った。(※パンセクシュアルとは、異性・同性などにかかわらず、すべての人を性愛の対象とするアイデンティティ)

4) 展示会場

展示会場では、関連企業、NGO/NPO、行政の展示ブースを用意し、会場の一部をラウンジセッションコーナーとして公開性のサテライトシンポジウム、セミナー、NGO/NPO活動報告などの発表を行った(図3)。この展示会場は、2日目に行った市民公開講演会「若者の性の多様性-若年層のHIV感染の課題」と共に、一般市民に公開し、参加していただける企画とした。

3. 学会を終えて

日本エイズ学会の特徴のひとつは、HIVに関する基礎研究、HIV感染症の医療に関する臨床研究、そしてHIV/AIDSの疫学、社会学、啓発・支援といった社会医学の各領域に関わる人たちが参加することにある。学会総会は、基礎領域、臨床領域、社会領域のそれぞれから順番に会長を選出し、総会を開催している。第23回日本エイズ学会学術集会・総会は、社会医学系の番であった。

今年の学会の特徴として、一般演題、シンポジウム、サテライトシンポジウム、ラウンジセッションのそれぞれで、HIV陽性者の治療と生活に関連したプログラムが目立ったことである。また、HIV陽性者がそれぞれのプログラムに登壇して発表し、フロアからも討議に参加している。この学会の大きな変化でもある。これはHIV陽性者の人たちが学会参加できるようにスカラシップ制度をHIV陽性者の団体と支援団体が設けてきたことが大きく貢献している。今回の学会総会事務局は、HIV陽性者の参加が一人でも多くなればと、35人のHIV陽性者の学会参加費を無料とした。

最近、アジア地域やアフリカ地域における男性同性間のHIV感染の状況が明らかになり、感染率が高いことがわかってきた。今回の学会では、このような状況を受けて、アジアのMSM(男性と性行為をする男性)のネットワークについて討議するために海外の研究者を招聘した。シンポジストのキョンヒー・チョイ博士は1996年か

公開講演 一般参加無料の講演

1日目 11/26 展示会場 プレゼンベース(イベントホール)

16:00-17:30 **HIV陽性者の調査から導きだされること-日本と海外(オーストラリア)の研究から**
 本ワークショップセッションでは、日本とオーストラリアにおけるHIV陽性者の日常生活とOQIについてディスカッションする。オーストラリア大学のグレインツ氏は、オーストラリアでHIV陽性者に対する調査を行い、その調査結果がHIV陽性者のための政策にどのように反映されたか、あるべきとなつたのかの事例を紹介する。名古屋大学の井上氏は、日本で実施された「日本のHIV陽性者の日常生活に関する調査」のレビューを行う。2名の講師の紹介を聞き取った上で、会場の皆さんとこのテーマに関する議論を行う。

18:00-20:00 **滞日外国人と性の健康: SEX★WORK★HIV★LIFE**
 「性的健康の重要性及び利用者は、『個別化医療』として認識されるだけでなく、具体的な生活・行動は『健康』として捉えられ、そのなかでも『外国人セックスワーカー』は最も社会的脆弱性の高い、最も深刻な健康問題となっており、健康増進に基づくネットワーキングの構築が重要であると見なされています。本セッションでは、これまで外国人支援、セックスワーカー支援に関わってきた関係者を講師として、それぞれ独自の視点で『滞日外国人と性の健康』について議論します。

2日目 11/27 展示会場 プレゼンベース(イベントホール)

11:50-12:50 **エイズ予防財団はどう変わるのか-新法人化に向けて (HIV/エイズの啓発とエイズ予防財団の今後の役割)-**
 昨年12月に公益法人改定法が施行され、現行財団法人は5年以内に一般財団法人、または公益財団法人のどちらかに移行する必要がある。わが国のエイズ対策のステークホルダーが数多く集まる日本エイズ学会の場で、財団の移行プロセスに関する基本的な説明を行い、意見を交えて財団のあり方や活動のあり方について、オープンななかちでフューチャースタジションを行う機会を皆さんと共有しています。

14:00-16:00 **mini サマーセミナー**
 名古屋市中では、毎年実施されている市民の権利の私立施設が主催するイベント「サマーセミナー」が開催されています。子育て・教育・医療・福祉・労働・消費者など多岐にわたる分野で、名古屋で市民エイズデーにアピール・リーダーを主催する団体、World AIDS Day in Nagoya(WADN)もエイズに関する講演を行っています。WADNは地域の団体と連携され、市民の健康意識のなかでも、今回は特に高校生に人知のあった若者の啓蒙活動を、教師や保健師協力のもとに実施していただくよう企画されています。

16:00-18:00 **今の医療に新たに求められるもの-一層の医療と共生をスピリチュアリティ/ケア-**
 病いとは、身体的な苦痛・苦悶のみならず、心霊的、社会的、スピリチュアルにも及ぶといわれています。その治療やケアも、身体的のみならず、心霊的、社会的、スピリチュアルにも対応して行われるべきです。医療のなかでHIV/エイズ患者は、医師のケアに加え、心霊的、社会的ケアの必要性も感じています。本ワークショップセッションでは、一人ひとりの生活や学業への支えという視点から、人間の尊厳と医療との関係やケアについて、HIV/エイズに関わる関係者や学生等と意見を交わす機会があります。

18:00-20:00 **セックスワーカーのいるまち 2009**
 「セックスワーカーのいるまち」は、「セックスワーカーとお客、ワーカーと家族、企業、職業的ワーカー同士、ワーカーとワーカーではない人、コミュニティと国家」と複雑多岐にわたる関係にある「セックス」に、あきらめず目を向けてきたりするとなく「セックス」に、1997年から継続して開催しているシンポジウムです。2009年最新「名古屋のセックスワーカー」をテーマとして、国際社会での議論を報告するほか、国内での調査研究を実施している研究者がその成果と課題を報告します。

3日目 11/28 展示会場 プレゼンベース(イベントホール)

10:00-11:40 **ブラジルの HIV/AIDS 政策 25 年の歩み-ジョセ・アラウージョの経験から見る市民社会の力-**
 国連機関 UNAIDS から最も優れたエイズプログラムとして評価されているブラジルの国家エイズ政策は、市民社会が構築したプログラムであると賞賛も受けています。そのセッションではブラジルの市民社会政策 25 年の歩み、特にHIV陽性者に対する一歩踏み出した、そして一歩退いた経験したジョセ・アラウージョ氏が国家エイズ政策の夢とエンパワメントについて語ります。

12:00-13:00 **HIV/エイズと共に生きる-1995年、そのときのエイズを思う**
 昨年、HIV 感染症対策に貢献した「HIV に感染しても薬を飲めばいいんだろ」(身体障害者になつたという知識がされた)「薬、やめた、薬の副作用は、ほぼほぼ耐えられる、個人の判断的な差別はしないし、国家エイズ政策の知見から、個人判断により治療を受けるようになった多くの人の成長を思う。「命が重い、これだけの命の重さは重く、今更、薬の副作用の重く、95年を振り返ることにより、ある人と一緒に過去を語り、未来へ向かっての歩みをお話したいと思います。

14:00-16:30 **ユース・スキルアップ & 活動発表会**
 本ワークショップセッションでは、参加者内で活動する学生・ユース団体を中心に、大学内での活動、夏休みなどの休暇、地域向けイベント、全国キャンペーンの展開など、様々なユースの活動事例の発表を聞き、学びと知識共有を図ります。各団体の活動に、興味を覚かせる講師の知識や経験、さらに、活動開始の経験、ノウハウの伝達について考えるきっかけづくりの場です。
 「STD 現場報告 実践どうなりました?」(講師:江川理江)レジュメダウンロード

図3 学会の広報-シンポジウムの案内

(公式ガイドから)

ら共同研究をしてきた友人であり、中国のMSMにおけるHIV感染率を明らかにした最初の人である。アジアのMSMにおけるHIV感染はかなり深刻な状況にあり、差別と偏見がこの人々への対策の遅れの原因となっている。

わが国の最近5年間HIV感染者、エイズ患者の報告数はともに累計の40%以上を占め、近年の報告数の多さが伺われる。HIV/エイズの予防啓発と共に、HIV陽性者へのケアは益々重要な状況にある。特に社会のマイノリティである男性同性愛者、性産業従事者、滞在外国人の人々は、今なお脆弱なHIV感染対策の中にあり、HIV感染リスクの高い環境におかれている。HIV感染症に対して取り組むべきことは、HIV感染者への早期検査

と相談に加え、早期治療と治療継続の支援、就学・就労や福祉面での支援であり、その支援体制をHIV感染対策が脆弱な人々に提供していくことは、これらの人々やHIV陽性者への偏見・差別を低減し、さらにはHIV感染の予防啓発にも貢献していくことと考える。

HIV感染症に取り組んでいくには、基礎、臨床、社会医学の各領域の研究者、そして地域社会における様々な関係機関がパートナーシップとネットワークを推進し、HIV/エイズの研究や地域の人々への啓発普及の促進のために協働していくことが今後も必要と考える。

2009年は5月から新型インフルエンザの世界的流行が発生し、学会日程の11月末には大流行となるのではと心配したが、幸い大きな流行にはならなかった。しかし、保健所をはじめ行政は、予防接種のシーズンとなったため当学会への参加は少なかったように思われた。登録参加数はおよそ1,250名、2日目の市民公開講演会（エイズ予防財団主催、名古屋市共催）には一般参加者を含め満場（およそ400名）となる参加があり、また、イベントホールでは関連企業、財団や大学等の公的機関の展示に加え、札幌から沖縄までのNGO・NPO28団体の活動紹介や一般公開のサテライトシンポジウムなどがあった。参加者からは、様々な領域の方々との交流の場になったとの声が寄せられた。なお、受付、案内、会場内照明・案内、クロークなどに130名のボランティアの方々の協力を得て学会が運営され、ボランティアの皆様からはHIV/エイズの現状やエイズ学会を知る機会になったとの感想があった。ここに改めてボランティアの皆様のご協力に感謝いたします。さらに、多くの関連企業や団体の展示や協賛によって無事に総会を終了することができた。

最後に、学会総会開催にあたり、厚生労働省、愛知県、名古屋市、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、名古屋市立大学、(財)エイズ予防財団、(社)愛知県医師会、(社)愛知県歯科医師会、(社)愛知県看護協会、(社)名古屋市医師会、(社)日本看護協会、(社)日本助産師会、(社)日本薬剤師会、(社)日本病院薬剤師会、(社)日本臨床心理士会から後援をいただき、また本学看護学部からは色々な面でご支援をいただきました。

2007年の学会総会で2年後の総会を担当することに決まって以来、岡本尚先生（名古屋市立大学大学院医学研究科・教授）、内海眞先生（国立病院機構名古屋病院・院長）、濱口元洋先生（元国立病院機構名古屋医療センター・部長）、杉浦互先生（国立病院機構名古屋医療センター・臨床研究センター長）、斉藤英彦先生（名古屋セントラル病院・院長）からは開催に向けて多くのご指導を賜りました。横幕能行先生、岩谷靖雅先生、三和治美先生（国立病院機構名古屋医療センター）、金澤智先

生（名古屋市立大学大学院医学研究科）にはプログラム作成にあたりご協力を賜りました。そして、名古屋市立大学看護学部感染症疫学研究室のコーナ・ジェーンさん、新々江章友さん、塩野徳史さん、高久道子さん、平川順子さん、福山由美さんには2年間の準備と学会運営に多くの時間を割いていただきました。ここに皆様に深く感謝申し上げます。